

今月の谷口雅春先生のお言葉

# 日本を愛する心をもつことが生きる力になる

国にはその目的とする「理念」がある

国家というものも唯物論的に言えば、小さい個人個人という細胞が契約をして、そしてこういう国を拵こしらえておけば個人に都合が良いというので拵こしらえたのであれば、これは人民主権だと言えるでしょう。人民主権と云うことは人体にたとえてみれば細胞主権ということに当ります。併しかし国家が有機的生命体である以上、一つ一つの細胞が主権をもつておると云うことは不合理なのであります。人体は人体として、ある目的をもつてつくられたよ

うに、国家も、国そのものに目的とする「理念」があつて、その理念目的の姿に住民が結びついて国家が形成されたのであります。少くとも日本民族は、国というものを一つの生きものとして、又体と同じように、一つの理想を有つ一個の「有機的生命体」であるとして考えたのであります。それが日本の民族精神であります。だから日本人の民族精神の表現である『古事記』には、人間の生れるまでに先ず「国」があるのであります。「国わかく浮うき油あぶらの如ごとくして暗くら気げなすただよえるときに生あれましし神かみの御名なは……」と書かれております。

先まず国家の「理念」があつて、其その理念が具象ぐしやう化して

瓊々杵命なる姿になって天降ってきて、その理念が沢  
山人間という細胞をうみ出した。それが日本民族であつ  
て、その民族が、それを生みだした「大和」の理念に従  
って一大団結して建国したところの国が日本国として実  
現したのであります。(新装新版『真理』第7巻269～270頁)

日本の心とは、すべてを

一つにまとめる「大和」の心

日本民族は総てバラバラに分かれているのを一つに綜  
合するところの天分を持っているのでありまして、日本  
の国の名前を「大和」と名づけられたということも、「や  
というの」は「弥々」と云う字が当てはまるので、いよいよ  
多いという意味であります。「まと」というのは「纏  
める」という意味であります。弓で射る「的」を「まと  
というの」、同じことでありまして、中心に「纏まっ  
ている姿を現わしています。いろいろに分かれていても、

その悉くが一つに纏まるべきものであつて、決してバ  
ラバラのものは存在しない、宇宙は一つである、世界は  
一つであるということのその人生観が、古代の日本民  
族を通して現在の日本民族に至るまでずっと貫き通して  
いるところの民族的信念とでもいうべきものなのであり  
ます。(新装新版『真理』第3巻241頁)

日本の「真相」を見出したときに

生甲斐がでてくる

愛国心の昂揚などと言っても、愛し得る値打のある国  
というものがあれば愛するけれども、愛し得る国として  
の資格があるかわからん現状のような日本国では  
愛することができないというのは、それは国というもの  
を、唯、単に形にあらわれている現状の国——即ち現象  
の国家——だけを日本国だと思つているために、こんな  
に強盗や、強姦や、失業者や、ストライキや、戦争や、

つまらないことばかり充滿している此のような国家は、愛することはできないということになるのでありますけれども、その現実の奥に「理念の日本の国」なるところ

の、目に見えざる「国の本体」なるものをみたならば、其処に希望が生まれ、其の国に生きていることに、生甲斐を感じ、其の国を愛することができるのであります。

外面の現象は如何にもあれ、それを内在の理念——理想に近づけて行くところに希望が持て、勇気が出、生甲斐が感じられて来るのであります。此の肉眼には見えなけれども、既に在るところの日本をつくり出した「完全模型」即ち「実相」というものを、智慧に依つて直観して、それを見出し、そうした完全模型(理念)に向つて、国を推し進めつつある日本国民が自分だ、という自覚が出て来たときのみ、本当に日本人としての生甲斐が感じられてくるのであります。

(新装新版『真理』第7巻272～273頁)

日本を愛することで真に世界に貢献できる

日本に生れた日本人は日本を愛し善くすることによって世界に奉仕し、人類に貢献すべきであります。日本人が日本的であることが、世界のためになるのは、桜の木が桜の花を咲かせることによって人類を喜ばすのと同様であります。国民がその国土に生れて、その国土から恩恵を受け、自分が現在安穩に生活を続けられているのも全て国土のお蔭です。国土の恩と同時に、その国土の開発につぶさに艱苦を嘗めつつ努力して来られた祖先の賜でもあります。此の恩この賜の一切を否定してしまつて、祖国などはどうでも好い、祖先の意志などというものはどうでも好いものだというように祖国に対して反逆的思想をいだくということは、恩の否定、賜の否定、感謝の否定ということになって、これは神の道——人の道ではないのであります。(新編『生命の實相』第6巻96～97頁)